

2019年度 病院医学教育研究助成成果報告書

報告書提出年月日	2020年4月3日
研究・研修課題名	小児アレルギーエデュケーター資格取得のための学会及び講習会参加
研究・研修組織名(所属)	栄養治療室
研究・研修責任者名(所属)	三次 佳子(栄養治療室)
研究・研修実施者名(所属)	三次 佳子(栄養治療室)

成果区分	<input type="checkbox"/> 学会発表 <input type="checkbox"/> 論文掲載 <input type="checkbox"/> 資格取得 <input type="checkbox"/> 認定更新 <input type="checkbox"/> 試験合格 <input checked="" type="checkbox"/> 単位取得 <input type="checkbox"/> その他の成果()
該当者名(所属)	三次 佳子(栄養治療室)
学会名(会期・場所)、認定名等	1. 小児アレルギー疾患基礎講習会(6月1日・2日 大阪市) 2. 第68回日本アレルギー学会学術大会(6月15日・16日 東京国際フォーラム) 3. 第36回小児臨床アレルギー学会(7月27日・28日 和歌山県民文化会館) 4. 認定講習会受講資格試験(9月1日 大阪市)
演題名・認証交付元等	
取得日・認定期間等	
診療報酬加算の有無	<input type="checkbox"/> 加算有() <input checked="" type="checkbox"/> 加算無

目的及び方法、成果の内容

① 目的

現在、小児アレルギーエデュケーターの資格取得を目指している。この資格は、高度なアレルギー診療の知識と患者教育に必要な行動科学に基づいた指導技術を有するものに与えられる。

現在、小児食物アレルギー患者に対し本院でも負荷試験や栄養指導を行っており、適切な指導を行うため、幅広い知識が必要である。小児アレルギーエデュケーターを取得することで、アレルギーに対する最新の技術・知識を習得することができると思う。今回小児アレルギーエデュケーターの受験資格を得るために必要な単位を取得し、資格取得を目指す。

② 方法

小児アレルギーエデュケーター認定申請するために必要な条件は下記の5項目であり、学会や研修会参加は必須である。今回は、④⑤の2項目を満たすため、学会及び研修会に参加する必要がある。

- ① 臨床経験が5年以上あること
- ② 小児アレルギー分野の臨床経験が遡って5年以内に2年6ヶ月以上あること
- ③ 小児アレルギー疾患臨床指導実績として20症例の症例実績報告が提出できること
- ④ 遡って5年以内に対象の学術大会に3回以上参加していること
- ⑤ 認定講習会受講要件として、過去3年以内の基礎講習会受講し、受講資格試験に合格していること。

③ 成果

島根県のアレルギー疾患医療拠点病院の栄養士として、幅広いアレルギー疾患の栄養指導・栄養管理に対応出来るよう、アレルギー疾患に対する最新の技術・知識を習得し、効果的な栄養指導・栄養管理に活かすことができるよう、学会及び講習会へ参加した。

(様式1)

1. 基礎講習会は2日に渡って行われた。1日目はアレルギー総論、気管支喘息、アトピー性皮膚炎、食物アレルギー・アナフィラキシーの4項目であった。

アレルギー教育の基礎編と言える講習会であり、各アレルギー分野についてより深く知識を得ることができた。とくに食物アレルギーの項目では普段の業務に関わることなので、病態生理と症状だけではなく、診断・治療・アレルゲン食品など多岐にわたり講習を受けとても参考となった。今後の業務にも繋げていきたい。

2 日目はアレルギー性鼻炎・アレルギー性結膜炎・その他アレルギー、アレルギー疾患のある家族のケア、患者教育の基本についての3項目であった。応用編と言える講習会であり、とくに家族ケアや患者教育の基本については、アレルギーの知識だけではなく、患者や家族とのコミュニケーション能力の大切さを再度認識でき、患者・家族とのパートナーシップの確立・治療目標の共有化・アドヒアランスの向上など今後の患者教育の目標も明確となり、栄養指導の際に活かしていきたい。

2.3. 第68回日本アレルギー学会学術大会、第36回小児臨床アレルギー学会へ参加し、幅広い分野のアレルギー疾患について学ぶことができ、小児アレルギーエデュケーター資格取得のための知識を習得することができた。

4. 認定講習会受講資格試験を受験した。試験は、気管支喘息・アトピー性皮膚炎・食物アレルギーと3項目に分かれて出題された。今回、アレルギー疾患に対する知識向上と小児食物アレルギーの栄養指導のレベルアップを目標に認定試験を受験した。

試験ではどの項目においても基礎知識だけでなく、症状に応じた治療や介入法など応用問題も出題されており、より深く理解していなければ正答することができない問題となっていた。

残念ながら合格することはできなかったが、来年も挑戦し資格取得を目指したい。